

環境滋賀 私の意見論評

随想「環境に関心を！」

神崎郡能登川町
北川恒雄

二十一世紀は「環境の世紀」といわれています。しかしながら、私は、琵琶湖の水環境のみならず昨今の観光客のマナーの悪さや意識の低さに憂いをおぼえております。そこで、『明日の淡海』の一読者として日頃感じていることを随想として投稿させていただきます。

私の住む能登川町は東近江の穀倉地帯にあります。町には自転車道の「よし笛ロード」や、関西一大きな水車などがあり、レジャーの拠点としても定評があります。町のキャッチフレーズは「水、緑、人が輝く水車の町」。このキャッチフレーズにふさわしくあるべく、行政を主体に民間諸団体や小・中学校が相互に協力して生活環境の維持管理や清潔向上化に努め、環境保全の啓発や実践活動に積極的に取り組んでおります。たとえば、シルバー人材センターでは散在性ゴミの収集活動や啓発を行い、地元の有線放送では、現在五十歳以上の方々の幼少時代の水環境について語っていただくという番組を放送しています。その時代は地下

水が豊富で流量も多く、自宅前の川では生活用水として利用できていました。今では考えられませんが、米をといだり野菜を洗ったり、また、洗濯物をすすいだりできました。夏は水遊びです。スイスイと泳ぐメダカやムツなどと戯れたと語られ、今はそのメダカさえ見られぬ現状を嘆かれています。ほかならぬ私もその一人です。

現在では公共下水道の普及率も六〇%近くに達し、生活雑排水の浄化に貢献していますが、その一方、付近を流れる河川や小さな溝には人が捨てた大小いろいろのポイ捨てのものが滞留し、夏季の腐敗や悪臭の原因となり、害虫発生の温床ともなっています。分別収集も十分にされているとはいえ、やはり手軽なポイ捨てに走る人も数知れずあります。湖岸は魚釣り、ドライブ、キャンプ場、サーフィンなどレジャーランド化し、ルアーや釣り糸が廃棄され、バーベキューなど飲食物の残りの放置も目立っています。

その後始末を地元住民がなぜしな

ければならないのか。ここに大きな問題があります。特に該当の年齢層は十歳代後半から二十歳代と推定されます。彼らも小・中学校時代は環境教育を受け、ゴミ収集の実践も行ったことでしょう。にもかかわらず成長とともに集団化すると鈍化してしまうのか、見て見ぬ振りをしているように見受けられます。その意味で、小・中学校時代から自主性と自心のバランスを図ることが大切で、まずゴミを捨てないように関心をもたせることが重要だと思っております。

では、そのための訓練や意識改革を誰が強力に押し進めることができるのか。それは、各自が小さなことからコツコツと始め、大人が、社会が、目を光らせていかねばならないことではないでしょうか。禁煙運動が当初、なかなか浸透しなかったけれども数年かかって現在実ってきているように、

帰り運動に協力を！とありますが、このままではただの板になってしまいます。ただの板にさせないためには、行政が自ら率先して実践することが非常に大切だと思うのです。まず、行政が働きかけることで県民に関心をもたせることができるのではないかと思います。この看板をただの板にしないようにしようではありませんか。

水や空気を安易に汚していることは、人間にとっても自殺行為なのです。安全かつ快適な生活、つまり、動植物も含めて共生することが「与えられた命を持続する」ことになるのです。それは本当に小さな心がけの実践でよいのです。

近年の「世界湖沼会議」「世界水フォーラム」の開催や「琵琶湖ルール」の施行など、「水」ひいては琵琶湖に向ける関心はひと昔より格段に高くなっています。このような機会を捉え、ぜひ県民一人ひとりの力で昔の琵琶湖に戻るよう努力しましょう。

淡海環境保全財団は、平成十五年五月に設立十周年を迎えました。これを機に、さらなる環境保全に対する取り組みを行ってまいりたいと思っております。つきましては、当財団に対するご意見やご感想、ご希望などをお寄せください。いただいたご意見は、次号（平成十六年二月一日発行）で紹介させていただきます。